

書 評:四柳嘉章. 2006. 漆, I, II, 437 頁. ISBN4-588-21311-1, 4-588-21312-1. 法政大学出版局, 東京, 各 2400 円 + 税.

三田村有純. 2005. 漆とジャパン, 美の謎を追う. 230 頁. ISBN4-89806-235-0. 里文出版, 東京, 2300 円 + 税.

評者はこのところ漆にかぶれている。当方の漆かぶれとは漆液に触れて炎症を起こすことではなく、漆工芸に傾倒することと三田村さんの本にある。勿論ウルシ調査で炎症を起こすこと（これをウルシかぶれと表現するのがよいのではないかと考えている）はしょっちゅうだが、ここでは漆にかぶれた著作を紹介しよう。

四柳さんの著作は二冊本だが内容的には全く一体、ついつい力が入って原稿量が多くなり、厚すぎるのでやむなく二つに分けたとのこと、中身はそれを紛う方無く示す圧巻である。これは國學院大學に提出した歴史学博士論文を平易に、一般のひとにもわかりやすく書いたもので、15 章からなり、第 1 章に「ウルシノキと漆の採取」があり、ウルシの植物学と漆液採取について紹介してある。第 2 章が漆液の化学と精製工程、第 3 章が漆器の分類と製作工程を、第 4 章は「新しい漆器研究」と題して「漆器考古学研究」の方法論を延べ、特に「漆器を科学する」と題した節はこれぞ四柳さんの十八番で、漆器研究の彼の武器である塗膜分析、赤外線分光分析等について原理と実際の研究法について詳しく書かれている。第 5 章以降は縄文時代の初期段階の漆器から 13 章の「近世漆器の展開」まで時代毎に遺跡から出土した漆器について、四柳さんが担当したものを中心に、実に歴大な分析検討結果を整理して述べてあり、この部分が本書の中核をなしている。第 14 章に「漆器産地の形成」についての考察が、最後の第 15 章には「絵巻物と文学世界の漆器」という楽しい章があり、付録として北陸の中～近世漆器の編年表と全国の主要漆器産地図がついている。

漆とその化学分析法、漆液の調整工程と木地制作、塗り工程、漆器の分類など、門外漢の評者にとってはいちいち勉強になる内容で大変有り難かったが、やはり一番興味があるのは初期の漆遺物で、最古のものが既によく知られているように北海道函館市（旧南茅部町）の垣の島 B 遺跡の埋葬土壌の赤色の織物状のものでその構造についての詳しい観察が記述されている。赤色顔料はベンガラだが漆自体がウルシに由来するものかどうかの確証が得られないで失われてしまったことを残念に思う気持ちが伝わってくる。以後、さまざまな遺跡出土品について漆液そのものの分析、塗り工程の解析、顔料分析、木地についての検討、更には文献資料との突き合わせなど、実に広い視野で漆器を捉えていて、実に勉強になり、また面白い。

一方、赤塚派蒔絵 10 代目の漆工芸作家でありまた漆工芸の研究教育者である三田村さんの著作は、漆の基礎知識、

漆の技法と見方、漆の歴史検証、ヨーロッパの漆、アジアの漆、の 5 章からなり、巻頭に「日本の歴史を彩る漆製品」、「世界の漆芸と塗料工芸」、そして「三田村三代に渡る漆芸の世界」のカラー口絵があり、目を楽しませてくれる。最初の章では塗料としての漆の特徴、漆かぶれ、漆の語源考証、漆の化学、植物学、漆液の特性、材や実の利用など、「漆雑学入門」といったところである。第 2 章では漆の採取法、漆の色（顔料）、素地、加飾技法、津軽塗りなど各地の漆器の紹介、そして美術品としての漆器の見方、があり、これが正に漆工芸を学ぶ人の教科書の役割を担っているものであることがよく分かる。第 3 章で縄文時代に始まる漆文化を時代の流れのなかで概観しているが、四柳さんの本と話題にしている遺物に重複があり、これがお二人の見方、立場の違いを描き出して面白。青森県向田（18）遺跡から縄文時代前期の漆器が出て、その口縁部に田螺貝の蓋のようなものが張り付いていた痕があつて、話題になったが、これが、漆工芸の世界の第一人者である三田村さんは「世界最古の貝螺鈿」とのお墨付きで、へえ、そんな凄いいものだったのかと、認識を改めた。

第 4 章ヨーロッパの漆では、海を渡ってヨーロッパ人に愛された漆器、japan の意味の検証と倣製漆器、漆芸への理解とあこがれなど、評者にとっては全く知らなかった世界である。第 5 章のアジアの漆には、中国、韓国、台湾、ベトナム、タイなどの漆産地と漆工芸、漆芸家との交わりなどが描かれ、漆が地球環境に優しい塗りものであることを強調し、最後に中国・韓国・日本の「おわん」の比較文化論がある。我々にとってはお椀を直接口に付けることが当たり前であり、また作法でもあるのだが、これは他の地域にはないことで、この、「直接口に付ける」というのが漆器だからこそのものであることを改めて納得した。

昔から漆に関する本は多々あるが、北野信彦氏の 2 部作の労作『近世出土漆器の研究』（吉川弘文館、2005）、『近世漆器の産業技術と構造』（雄山閣、2005）に見るように、このところ漆器遺物を取り上げて深く追求した本が相次いで世に出たように思う。それは評者がこの分野にごく最近迷い込んだ世間知らずだからかも知れないが、そうだとすると、これらの著作がよい道しるべとなり、更にさまざまな疑問が湧いてきて研究が展開されることが期待できる。三田村さんの本に出てくる中国の石家荘近くの皇賛県という漆産地を早速訊ねてみたいと思う。

（鈴木三男）